2023年(令和5年)12月15日発行　土屋新聞　第33号

土屋グループとクライアントをつなぐ月刊誌

広報 土づくり 12月

これからも驀進走行

施設で17年間暮らした後、地域生活を送っている坂内洋士さん(61)。45歳でNPO法人BAKUを立ち上げ、長年、障害者が地域で暮らすための支援を行っている坂内さんに、自立生活にかける想いについてお話を伺いました。

プロフィール
名 前：坂内洋士(ばんない ひろし)
在 住：札幌
障害名：脳性麻痺による四肢麻痺

■詩を書いて過ごした日々と福祉村への入所

函館で生まれ、幼い頃は家で音楽を聴いたり、詩を書いたりして過ごしていました。小学校に入学する年になった頃、病院も兼ねている学園を希望しましたが、就学猶予で入れてもらえず、翌年に母と私で院長先生に直談判して、入学の願いが叶いました。

そこから小・中・高と進み、卒業後はしばらく実家で過ごしていましたが、身体の大きくなった私のケアが母には大変になってきたので、19歳の終わり頃に、岩見沢市にできたばかりの福祉村に入所しました。

■福祉村での生活

福祉村は当時、350人程が入れる大規模障害者施設で、個室もあり、自立に向けて生活する方が集まる比較的自由な場所でした。授産・更生・寮護の3つに分かれていて、私は寮護で暮らしていました。

福祉村での私の役割は、作業棟での朝と昼の見回りで、自治会では給食委員から始まり、最後は事務局長になりました。また、療護で初めての役員にもなりました。プライベートな時間にはワープロをしたり、友達の部屋に行って焼き肉を食べたり、お酒を飲んだりしていました。

■24時間テレビからオファーが！

施設にいる頃、ある番組に自作の詩を送ったところ、24時間テレビのオファーをいただきました。その詩に友人が曲を付けてくれて、番組内で沢田亜矢子さんが歌ってくださり、放送後はいろんな方から連絡が来るなど反響もすごくありました。

■福祉村での思い出の数々

ある日、お酒を飲んで寝ていたんですが、ナースコールに手が届かなくて夜中に失禁してしまいました。主任と担当職員から1年間禁酒の話を持ち掛けられて、かなり抵抗しましたが、担当職員に押し付けられて1年間禁酒になったことがあります。

またある時は、私が「携帯電話を買う」と言うと職員に猛反対されました。同じ棟の入所者が黙って買った際には、「買っちゃったものは仕方ない」とお許しが出たんですが。福祉村は割と自由でしたが、なぜか私だけ色々と禁止されましたね。

■出る杭は打たれる

福祉村では当時、食事の時に熱いお茶が出て、それを職員がある入村者に無理やり飲ませていたのを見たんです。私は給食委員だったので、「熱いお茶ではなく、ぬるいお茶を出してほしい」という要望を出して、それ以降、改善されました。

他にも、授産・更生の人に「療護はお荷物だ」と言われて、寮護の地位を上げるために、寮護の人だけで演劇をしたことがあります。それがきっかけで発表会をすることになり、それが長く続いて最終的には福祉村文化祭となりました。「出る杭は打たれる」と言いますが、私に禁止事項が多かったのもそのせいだと思います。

■施設を出て、地域へ

ある時、社会見学でビール工場に行ったんですが、私はお酒を飲ませてもらえないのに担当職員はガバガバ飲んでいる。その姿を見て腹が立って、「施設って嫌だな」と思うようになりました。

施設には宿泊旅行やクリスマスパーティなどのイベントといった良い面もありますが、時間に追われていて自由があまりない。買い物に行くにしても、重度の人たちは1～2か月、待たされることも多くあります。だから地域移行を熱望する人が多くて、私もその一人でした。やはり団体生活が基本なのでプライベートがないんですね。そういった時、自立している障害者の方が施設に来られて、その方との出会いが施設を出るきっかけとなりました。

■大変な生活の中でも

36歳で施設を出ましたが、一人暮らしをするために、まずは学校にボランティアを探しに行きました。その後、自立をサポートする団体にお願いして、アパートを探してもらったんです。そして札幌市で自立生活を始めました。当時は、ボランティアが急に休みになると電話をかけまくって探したりと、ほんとに大変でしたね。

■NPO法人BAKUを設立

38歳くらいの頃、障害者と健常者、そして私の3人で、介護事業所を立ち上げたんです。けれど、段々自分の考えと合わなくなってきました。私は「もっとたくさんの方に24時間介護を付けて欲しい」という気持ちで、市役所の前で座り込みをしたこともありますが、どうもメンバーと方向性が異なってきて、自分でNPOを立ち上げようと思いました。

そして2007年2月、「どんな障害があっても自分らしく暮らすことができるようにお手伝いをすること」をモットーに、NPO法人BAKUを設立しました。

■BAKUでの活動

現在は障害者が地域に出ることは容易ですが、以前は難しく、みな決死の思いで地域に出ていったんです。BAKUでは、障害者が施設から地域に出るお手伝いをしていますが、それに伴って時間数の確保を目指したり、ヘルパーを募集して利用者に手配したりしています。行政と1年に渡って交渉し、ある利用者にようやく24時間介護を付けてもらったこともあります。

またBAKUでは、交通不便を解消したり、バリアフリーの取組みに積極的に参加したりなどもしています。BAKUを立ち上げて、まず行政と企業への働きかけをしましたが、思い出深いのが、BAKUの利用者が飛行機に乗ろうと空港まで行ったところ、車椅子のガススプリングがダメと言われて結局乗れなかったということがあったんです。後日、私は飛行機会社と車椅子業者、ガススプリングメーカーに電話をかけて抗議したんですが、それがきっかけでガススプリングは日本のメーカーならOKということになりました。

■人生の喜び

仕事をしている中で、行政などと交渉を続けて、こちらの要望が叶った時はとても充実していると感じます。苦労も多いですが、昔から「おかしいと思うことは変えてやる」という気持ちで生きてきました。それが、私の活動のエネルギーになっていると思います。プライベートでは、音楽や映画を楽しんでいます。オーディオにこだわってレコードで80～90年代の邦楽を聴いたり、スタートレック等の宇宙に関する映画や番組を見たり、歌うのも好きですね。食べ物は、寿司とガラナ飲料が好きです。

■現在の生活と今後

現在は24時間、365日介護を受けています。訪問入浴も利用していますが、札幌市は本来なら週2回は入れるんですが、事業所の都合で週1回しか入れないのが今の困りごとです。あと、腎臓が悪くて生活腹膜透析を1日4回行っているのでなかなか外に行けず、毎日少しずつパソコンで自伝を書いています。今後は体調を維持して、BAKUの活動を通して障害者の社会参加のお手伝いをさせていただいたり、できれば行政に障害者のための要望などを出したいです。

■メッセージ

みなさんヘルパー不足で大変だと思いますが、めげないで頑張って、自立生活を送ってください。

家族あるある　人間、生きてなんぼです

最近「人生100年時代」なんてよく聞きますが、脳性麻痺1種1級の障害があって12歳年上の夫から結婚の申し込みを受けた時、「絶対に100歳まで生きる」という約束をして貰いました。私が老後に早く独りになりたくないからです。彼は自分が100歳まで生きる為に「君も病気しないでいて欲しい。それに僕は精神的には支えられても物理的に君の世話ができないから」と言います。ですから、私も元気でいられるように好きな酎ハイの量を減らして頑張ります。でも、私がいくら元気でいたとしても、この先、彼の障害による身体的機能低下が今より進めば、介護サービスの支援時間数を相当頂かないと、私一人では体力的に厳しいでしょう。介護サービス時間数を多く貰うには、それを決める役所がその根拠を求めてきますよね。医師意見書に「障害によってどれ程生活に支障が出ているか」を書いて貰う時、本人の意見をよく聞いた上で医学的な視点を含めて納得できる意見書を作成してくれる！と信頼している主治医（75歳）にも、「これからもずっと現役医師でいて下さい！」と懇願しながら、夫との「老後」をとっても楽しみにしています。とにかく生きて、もし2人共寝たきりになったとしても、バカ話しながら楽しく暮らそう！と、お互いに励まし合っている今日この頃です。

（夫が脳性麻痺1種1級）こもとゆみこ

本年も広報「土づくり」をご愛読いただき、誠にありがとうございました。来年もよろしくお願い致します。新しい年が、皆様にとって幸せな年となりますように。

お知らせ

「家族あるある」夫婦の動画です。
是非ご覧ください→

（こもちゃん&ゆみちん）
https://youtu.be/vtyNYikxCFI?feature=shared

ご意見・ご感想

土屋グループの各種取組みについてのご意見や、当社介護サービスにおいて虐待や不当な身体拘束が疑われる場合がありましたらご一報ください。

ご意見・お問い合わせ窓口
client@care-tsuchiya.com
発行元:株式会社土屋
住所:岡山県井原市井原町192番地2
久安セントラルビル2階

優しさを誇らしさに 土屋